へ 5
4110
5

門へ利5
4110
ム一ム

俳諧一葉集附合々部四

古学庵仏兮 編
幻窓湖中
坎窩久蔵 校

元禄五壬申

蕉翁の俳諧に養する様の先
ゆ先生の座のはしらの支考
蕉翁父入八品義入と尺をうけて
ちくさみあるうち第一指し
却て翁自称くしゐてある
俳士此の手庵の集れ家
考

ウ

高の倉すゝうつの村れ雪き　秀
葉ゑみ百千　もちらさふしひ　菊

くもりしと言する物を苔やる
瓦うよ能ハ紙　朱　能　秀

二三寸ものハ苔はそてとく
数をそ和　こ尺ちうの色　秀

雪蒙うそれ物つける苔の月　菊

楪おるきぬハ角力丸の年
角雪の田ハ山くやうの峰きて　秀

英時の星のまこひけう
法仏千岩陸　命も苔こう石　菊

白川清　こ　紅の紙入

二

傍の傘おもて側ゝうえ
多鉢を持て人の名を　同　秀

本猫ゝ和ハ和のかう　菊

重をこけ　こ　紙をつを星

松風のすん　と　秋寺さ　秀

物ふゝ傍と　岩ゝ門　寿　菊

傍ハ多のゝ苔ゝ苔るま水秋
る一匹千　角をけ　秀

小調市の対ゝ　こ　こ
痛ゝ多けきハ女　角　こ人　菊

むさ　こ　清　以月の入ゝう
時の板ゝ　牧　杉の　こ　秀

二の丸の定ぐうやく壽限　菊
白き あつうて 人の 翁は
さしく 蒙 濃の 食を 喰ひ 秀
口上 いつて うえよ 義 堂
代 祢の 蒙 さうに 咲 拔ひ
ゑ 乃を 拔 て のひら 青 拔
い い

まちや小 能 のいろむ 二 段 撒 納風
拔 すさ る 岸 の かう 株 菊
足 知 ら ひきう 芝 ま え い て 法 蓮
力 の 拔 ら ち 状 蒙 利 牛

食 傷 の 後 を 洗 ふ 郎 の 角 風
度 ゑ し 拔 て 金 の 麦 ら 菊
小 撞 ら 赤 た 本 撞 の 丸 ひ し 桃 陳
孤 一 文 ち 六 弦 を ら 毛 牛
藥 翁 白 色 の 足 む 弦 ぶ 麦
麦 の 赤 ち 麦 の 義 撿 菅 良
尺 る 洗 ち の 子 供 ら 生 い の 法 菊
古 ぶ す し ま ち 天 飯 を 狗 法
ち さ ら て も 狗 傷 を 洗 く 麦 ち 牛
義 を 焼 く 洗 う 咲 を 矢 陳
月 影 の 阿 ハ 佛 の 基 生 し 菊
ぬ す 人 深 し ち 蒙 の 郎 蒙

雷掛の峠なのうつる花の雲　良
ふる雨に芋の葉ばかり　恩

雨の多く松と横や芋の餅　菊
菊子ふれし蜘蛛の巣　嵐雪
野辺きの大蘆まばらなる　其角
山の坊あるさの陸奥まつ　菊
茶こ子肩毛の弱の多的　雪
風ひやすうまれしの雲　角
傍雲ヨ撲のあるさしれ　菊
筆たころうさ金のしあ　雪

窮を主新撰箱の南堂大出　角
豆まきの宵の雪の茶碗　菊
酒さまの杖子かの雲の　雪
剃やとまく山の赤の紅若　角
まけ平功者引て鳴るし　菊
ふくひ多る寄の坊方　雪
尺尺して奴性へ逆人角の夜　角
尾の結ものと小男無　菊
一面ひのんの赤地吹蒙し　雪
の永久るの時や寒　角
喉子縁きくきん菊法坊　雪
お醫者中一宝ふ仏元ふ　菊

船を漕よしとかの欲し　角
堤打ゝ所の入れ　雲
女房ゝ米取の寄ゝやおそし　菊
宮田の喧嘩ゝ　角
高宮ゝ一番の家六枝を乱し　雲
多ゝ多紀郡の石蕗ゝ　菊
牛の子世牛ゝ　角
江州坂秀の田舎　陸尺　雲
とのゝ取ゝ入角の浅瀬　菊
いとゝとゝと　雲
鮒ゝ　角
すんすゝのひる家兄弟　菊

一ゝゝ江戸を尺ゝのゝ小言ひ　雲
みゝゝ一度て祇の門杉　菊
宗ゝゝ未来を極ゝ世のうけ　角
三人吟ゝ表のゝゝ　雲

芭蕉庵舎

風体のよてゝ俳諧や明ゝ　涼菓
旅の宮雛ゝゝの宗の宝　菊
砂川ゝひゝゝ又釜のかゝふゝて　青山
門ちりひゝゝ腎者の兼おさ　蓑良
月の取ゝ足ゝゝ面白ゝ　濁子
志ゝ面白ゝゝ　嵐蘭

ウ

産業既のまを業とする家の中
めらみひとりと云むに陸尺
うのめらく人をてしむ奴うて
そろもいろう仮名をを去
り物を頂て新をかくし合
木賃酒うハ不残先まする
入うけも別お言ハ此の月の
塩をいなて云ハ家ハ
らおろお晴そ白を抜むぬ
小船の文を送る村し
此花手お投海やうめけむ
寺のられ木をうのすをれ

然水
妙水
嵐雪
紫
菊
怒誰
良
山
妙
る
紫
然

入物も田湯手似きて牛荒
かうをきけハ先合を木
長うぬ幾人をの変変
ゆ手うれて注花き
火桶すう和ぬ取の月清琴
業麦の粉ふう聖の振蕾
返すをぬ手我ハ掃て拾めん
おうけ点ハ点のおうよ
義変手風ていい付いものお沙
先生和ようお秋のメられ
柿尺丈の富麦うの店の月
偏うつれて小舟のうこむ

紫
雪
山
子
業
雪
紫
然
良
菊
山

猫の尾分きけるる旅の童　重茶
雑木の岩ゝ弥ゝ紅　樂
ひさゝきうちよ中を宮れて　然
きけん者ゝ酒もゝ色ゝ　子
やゝやゝしかゝ迷ゝ色の雲　良
茶をゝふゝ人千怖き

終のわや秋ゝゆきし去の色　史邦
おのれしと姫切峠止　沾圃
外義しまゝめゝ月ハゝ　菊
郭公はゝ板の月　魯可

さやゝゝ酒ゝ鳥の匂ゝ　沾
栗丸きゝる川上の山　秋
ゝろしと形のゝき石拾ふ　可
ゝゝ月れハ麦ゝ　菊
雨ゝゝゝろく咲る花の色　秋
祖父の胸ゝ栗ゝ　沾
る所ゝれ食ゝ秋ゝゝ　秋
結ゝゝかくゝ手ゝの雲　可
ぎゝしゝゝ雲ゝ　沾
凡ゝゝゝゝて雲ゝ　秋
狭搭ゝ戸塚の角の侍ゝ鶴　可
後夜霧ゝゝゝゝ　菊

すんすると昔代べくむ花の色
ぬるうのすさんぬ仲なの手の
きるこ一次きるの
貸すふうて百あの家
いろのく疲るる色を化粧を
蔓しうるうしの白髪姫の姿
繰出厭解ずきて八重の髪
弁当洗とくすの居る姫
うおるのみ仕渡十富を立て
為古ちうしゆく通載の梵子
悔しるみちい松の方しと
渡をめるの自蝕

沾
可
秋
菊
可
沾
菊
可
沾
可
沾

お志とあの上さん風八多うを
おるうしけこもちひとう咲
動めとして去て徐なの四うを
文を小姫うるんうちひとの明
白海八めるる去れみいむ
縄てうしけし家ゆうし今
海和よ悔かるうするるさう
素良ハやつるる八重樽外

里圃
乙州
沾
里
州
沾

時るふうに寸きすし彩の春　史邦
菊一休を稲のこと　貸　菊

蓼の種と醤油の饌をかなへ　盛水
筑前の人のしるす　有　秋
木刀の書　水　居合の業　菊
二階そしこの前の蕎麦　水　板
言さしと等の二を吹立て　秋
石丁あれハ学問ちの種　菊
手習ニ野筆　水
唄うたとも中けぬふ松魚　秋
風流の隙の約束居ぬ　菊
秋入りの筋　水
嘘演と降つ　秋
雪信ちのしちのいきうし　菊

指南の剣刀を持くさう　水
ちくさのうちうまうまの物　秋
花を飾一年まおまし　菊
小姓のはれきを二月　水
二竹橋の内ちの嵐ひ嵐穴　秋
ちの業このく役をいちの　菊
夕雲と洗濯　水
といめちうし組母の帯い　秋
橋うちまれハ打ちもひち鎌　菊
代ちうさ盟ハ白ん　水
粉逝いの交てちる切ちも　秋
百里を中し　菊
船のきめし

挽うしたる木材木の行ゆきひ　水
まつとそれぬ中ハ生駕　秋
いふと詩を言ふ意をむ月の雪　菊
雪ふをやらて明るのみ行屋川　水
掛鉢ゑ植ていろ分屋のうし　秋
陸る意る為うえ　のうる　菊
加南意陸意のりさう　水
二駅三日社　鉢るゆうき　秋
考て芋形やの　くのむさう　水
百時やまむ苗代のひ戸　菊

草庵懐古人　澤子

角自や簾以南のくれを待　菊
家子桃のくぬ出の青　千川
桃を張し越さ花の色　涼葉
まさふれの海のうち　四筋
端くぬ鼻武安ふとうた　子
めれハ板のにそ　滝
鶯人の矢先のけを振て　菊
青ゑ高ち意の　川
入口ハ張ゆつ　筋
きうこのひ簾の張板をとく　子
舟こうう鮫くいてみまくみ　紫
柳うえうまひ帳る　川

代尺やしけりもこ袋の屋抜て　菊
発しのこゝろを咲あるて　秋　節
月新に雪あるて里ふ島帽子数
屋の夏の古いしる　春　川
花咲ハ木なるよ生引すうて　菊
かこうもゝぬ去の南風　節

物葉やゆさら変ぬ村の春　菊
まきさしきて河る谷川　盛水
殿ふう屋村の多地さやて　史邦
さこむ月を蓋瓶の蓋　半蔵

塩付て餅ふ浮ての蓋　秋　嵐蓋
撰さこゝさる華のひゝさ　菊
うゝよるまハ出物ゆゝ夕雪蓋　水
秋秋の蓋ハ浮ふ月の宵　秋
弁当の菜を見をく石の上　蓋
やさしきを咲るゝてこ　蓋
よい物の蓋ゆ雲ら九く物て　菊
物ゆうちて咲つき見ゆ　水
月蓋て白の降止星ゆう　秋
ふ鍋の後ふ浮発く蓋大豆　蓋
絹ゆ年ゆさ越さて秋の風　水
春て蓋ふゆさ小坊主　秋

花ちるのやまとなでしこ　菊
ほそき茎のうへにわらの帖　菜
きぬぬぎ古歌ゆゆしき紙屋紙　水
春は山ぶき伊勢物語　白　菊
琉球の砂糖　冬のおもて　鉢
見ぬ世の除ハ酒けん物　役　鉢
元しるしてをはるし本高の上　菊
除入するうちやはらぎ引　菊
袖ぬるる涙惜まぬ春さき　菜
月ところ〳〵きき醤油の粕　水
芋茎百石ふれ門すまひ　菊
ちるさくらけるる素良の坊方　菊

かるるなる度けもはくすの係面　鉢
尺〳〵めもぬ笑〳〵生のなりはふい　菜
出店〳〵と又も陸奥のかりれて　菊
干物はなやぶ特色の鉢　水
手拭のおきれてをれをこ菊り　菊
結菊をかふ也板菜の上　菜
人つゝく毛利菊川の花さう　鉢
ものもけんふうきーの菊い　菊

まくてもうくふ物をもらふし　菊
捉ておもふたべ秋の新鍬　酒壺

雲の月柳のうさかさよりて　嵐葉
坊主かしらの先手を　岱水
松山の綱ハ法師の岸をこの寺川舟　菊
結姫の岸をこの寺川舟　豊
[illegible]山寺の渡りうる小屋　水
ふうさ法師の酒を　葉
掛乞の乞のひきを結をそや　菊
翠庵を尺をうこかの義の禁　豊
寺嫌す山寺の中へ　葉
正寺寅のもむ風の柳さ　水
用のうに先よりあてやう　豊
きのうえうを徳おさえ　菊

俗すふ義花の雲の月秋　水
秋智のお山のまおをを　葉
引法めすうをうをを　菊
義うを手寺の海へ飛　豊
二町中のうをハ赤くきうを　葉
次くをうすす秋分部う　水
華元袋と地をを秋の雪　豊
伏尺ゆうの寺を屋の月　菊
玉手のお尚をきけハ惜や　水
系語うをを紙歩末う　葉
山伏をゆしうは寺の系　菊
篭持ねハうをの中　豊

つき合ハこれ上戸よし飲ほのし　菜
きりつてしとあつれ様し　水
のり物て和尚ハ乳手ゆうりて　壺
主こ兜しゆる笠の大日　翁
樸柄さ多ぬ田と菜る人の都　水
むしろ佗荷て鯨ま汁ぬく　菜
不踏ミ河沿鯉鮒の扇の木綿市　翁
形象をりええむ去年の出窓　壺
朱五升人かられるもえきん　菜
きしのわろきほふ翁笑　水

菊株や西田の上は秋のころ　洒堂
葉うしるはず代着る陌　嵐竹
衣棒棹ちて手の足りうて　翁
畫草気ふる笠の雰雨　小鰕
古銭埼有も静まで漂ろう　嵐景
ちはし尺迄了家宮の笠　壺
さし汐の川の程ずあるさも　竹
寛をは吟れハ解出入虹　翁
屯き精ぇ肩休まるそつしら　鰕
水仙さうる房州の鯵魚　景
鰯清米の金廻し奴すきの上　昌房
蔵手かさふる鯰の桶清　正秀

小竹ノ内伐かしてなむ紅葉
錦も事なれと身待の色
物ちらぬほうの添のうらさみし
ちもいなむくく三方の襖斗
花のうち射来より瀧陽くん
隈ゴくれの山のうら吉面

十月廿五日亭無り　菊

くさくさ人もとくれ紅葉
時も仕はしらぬ去
酒宴をきん小松の時雨して
汁のみくくの秋の風くれ

仰高
拙志
潮力
野任
去来

許六
洒堂
盛水

言の葉おくく入れて古き
先ユ文すう帳の物ゆ
オ汁の侍者中ゆ惜れて
焼こうくくう小法ゆき清
粽つむ笹の葉をかくう
猿礒をの紅葉赤の入日
水分ハ隈ゆ人ゆ歩ゆて
紅初ひのけて蟬の時飽
青雲をゆ秋の空迄て
小ゆ森の風をくくゆ
八月ハ船もしゆ小船弥
焼山くくの赤くけ

蘭葉
執筆
水
菊
六
壺
葉
水
菊
六
壺
葉

歩歩すゝみけるに花の木うゑけるを
作りゝ長寿ゝ　物の卵ゝる　水菊
まこゝ源く作光の宮夫ゝ門ゝや　六
黄麻　逸を酒ゝ飲すゝる　豊
さゝゝゝと鶯一本ゝ手ゝ手ゝて　業
歌ゝゝゝゝ室ゝ長ゝ物の上　水
物火の影めつゝしき甲侍　菊
山ゝゝゝきして山をむゝ寿　六
咲きゝ手魚の寿ゝ焼ゆゝれて　豊
尾月ゝかゝふみすの女方　業
いゝゝゝれ逸ゝ光ゝ雲　水
野逸をゝうゝて出るのゝ　菊

ゝ田ゝ畑ゝ門寿の小方丈　六
香のゝゝゝ如孤ゝ　豊
一すゝゝまゝゝ紫の寿ゝ苑原　業
源ゝゝゝゝ家ゝ松海の坂　水
宗長のゝ記すゝ白ゝ家め作　菊
業ゝすゝゝゝ百姓の家　六
物ゝまゝて廻る神ゝ米　豊
七十の賀のゝゝふゝゝゝ　業

俳六序無所

二句作ゝ宗祇ゝ宮寿家一斗
宋玉外六ゝ八寿ゝの仕合ゝゝ

此見て家と名のつく家うれ　洒堂
俳諧もうふ事もむずの里　許六
うきさ面白すの後をつゝふ茶て　菊
きハ千やゝ七ときもの　嵐蓑
月のひろ狩も鉢ふか鮎　六
策地も家て興ふの雪義　巷
おゐちほうんのもれさうも　菊
桃の蕾とる茶て水の子　巷
面白の名蕾ふ作さ桃　六
もう嘶て雲所注する　菊
きぬ〳〵小雪の踊の沼をまて　蓑
東大寺の月うすゝき作

寺詩の板て寺やとす寺の寺　六
二人の杖杖仕先て作く　巷
茶うけの提灯志めす新蕾　蓑
沒さし一つる星川の橋　菊
村そも田面の名れ書ミ立　六
塚のうゝいの方面ふ石原　巷
蕾蕾信の沙ふめうはふ書の未　菊
ゝを照れし今川の茶　蓑
うつ沙塚根の風をよう無　六
又きるうう四玉田のうき　巷
新家ふめきうう蕾の志　蓑
ようれし絢て二ゝ麦の粉　菊

冨士をかり込流しき井戸のさらへ　圭
月夜々髪を洗ふもみかへし　六
火ともして砧打こそ子供達　翁
先繕ひくる手の物来　荣
うつすりと門の瓦に雪降て　六
言観音のかり崎を見る　圭
ミ
そもや学問好を見違へ　荣
なまりの検見に涙もかくして　翁
よし垣に木をくゆる燭の内　圭
なハ霜かる二月翁は　六
神花に侍者の蛇の衣を見て　翁
柏樣にやく宮川の上　荣

支梁亭口切

口きりに境の庭ぞなつかしき　翁
笋見よと藪の案内　支梁
山雀の笠ゑ隠しおさ手にかくし　嵐蘭
秋の野守のさかしの所　利合
旅人の噺す月の明かゝり　洒堂
大戸を明けてもる躶身　岱水
ウ
雛の玉子の数を青接へ　桐奚
何からて橋を渡初るし　也竹
みどりさす前田の杉なり植て　支梁
こけ葉まじく赤豆の汁　翁

こゝろかるく雨もまぢる雪の羽　合
猩々ふくるゝ松坊の梢　雪
さゝしと陶潛ゝる不の上　水
酒し先食のあやすき月　葉
紛雲の長門雨を秋立　雪
家子朽けむ一編の清　梁
面白入花先庭の百生床　竹
苣の二葉のかくて浮のめく　宴
朽を八幡寺の山郷に巡られて　合
光子さきさし釋迦堂の雪　雪
吹初て寺のふるもとゝ猿辺ゝ　菊
ゝの流の枇杷のうすいろ　葉

九月十三夜　旅の船　宴
きよけ子法華堂さゝ社家町　竹
白さゝに餅を雪ん　雪
みよしの家はもゝふ川に　梁
ゝはもの鶴の赤子肩寄　合
ちん黄ゝゝゝる門前の坂　葉
波ゝゝの物煮し吟ふ雪の月　菊
上毛吹ゝ志ゝ　宴
谷傳ひ一つのけゝ牛筏　竹
方力朽はゝ二ゝゝゝ　雪
物ゝゝすゝれ鄰よおゝ也　葉
雪子かゝくゝる九月の　梁

[illegible]さう[illegible]宮の河の人通り　実
青と葉とわの神そ[illegible]し　執筆

木ゝにうめる百重を入江の　荊口
毛をひく蛍[illegible]の[illegible]板　洒堂
掛乞の中[illegible]そうたえて　菊
[illegible]しハ木[illegible]殿たくゝち　此筋
梨の枝おもを[illegible]ハ[illegible]の月　左柳
柳ういろふ芋かゝの[illegible]け　大舟
秋[illegible]架[illegible]植る[illegible]のやと　千川
[illegible]の[illegible]の[illegible]　菊

六月のゆも四位[illegible]板の木　圭
[illegible]の入ゝ[illegible]滝ゆるまる　板
[illegible]雲[illegible]し[illegible]浮[illegible]宗　筋
[illegible]而の[illegible]れく[illegible]山　川
[illegible]の[illegible]おろす[illegible]の[illegible]　舟
俳[illegible]の[illegible]を志こく　圭
月代を小[illegible]き里の[illegible]れ[illegible]　川
[illegible]滝ひ[illegible]し[illegible]の[illegible]く[illegible]　筋
[illegible]れぬ[illegible]さう　板
[illegible]の上[illegible]ゆ[illegible]の[illegible]　菊

あるまゝ酒ハ徐をおてゝ　凡峰
白浜さゝ子芦　新　し　菊
中汲の磯を行のゝ棒さけて　酒堂
月の徒手皆拾ゝ　峰
蛤吹ハ板の宮こゝさゝと　菊
板のほゝに雨をぬる　堂
ずゝれ戸を袖口あをなの鶏　里東
果ハゝれし撰る　菊
泣ぬて古巣ゝふゝの鶏　峰
沛余ゝし強金を立　東
門ゝ子ゆるのかさゝ紙砧を　堂
むしろゝもむれとゝつゝ陰鶏　峰

山ゝけを中れ子むし石生の扉　菊
梨地蒔けゝ光のさけ鶏　堂
角ゝ月ゝ舟の格れ一ゝさけ　東
ゝ　の米を背ゝふゝゝ　峰
花子書し彩ゝ石佛法ゝ　菊
書ハかゝゝぬ三梅の人窟　堂
頃花の花子撰ゝ杖歩ゝ　東
ゝむ衣子芦蕾打をく　峰
きんゝふ娘ハ格の牧ゝい　堂
意のゝゝれを尺ゝ好絢　菊
姝代の雨れ志ゝ風ハ絢て　峰
天漂ハ行吹て辛ゝ秋風　菊

文台の前に鶴をおろす式の事
聞ふしたする賀めもし入　峰
麦めしと文ぶめ飯を炊きけて　菊
陶引すう川舟の　紬　嶋
性子風と深しさ中小姓　雪
めの時迄ろすを変者の文　菖蒲
美しき春の匂ひを似きて尽り　嶋
人間子ら人と引きくの珠玉　雪
一点子地主桂枝の花さう　角
掘子ちの寸ちまてきらめく　嶋
学子てこの子ろの子いろいろ　雪
果且味を鼻孔の口　角

十二月廿日即無
却ちて花を入れ梅山茶　菊
咲こむ中の初雪の前　彫栄
月子こ面白き引えく　其角
明れのよこ面ゆをを結ふ　黄山
夕月のそふけ子ろ絶屑　桃隣
出代さて秋そきけ　銀杏
四子ふうきあえしゆ植の去　栄
肩こ美こ子ろ智舟ら新　角
足元子茶しあん咲けの色　杏
茅を養こ廻子伯陵の学索　菊

六張の夜具をすく枕して　山
はめしに猫の身をひるめ来る　陳
むりやうさせ蚊の点　棠
現は夜と言やせうへ　角
夜の雨蛍のくさくさむ　菊
三寸の鼠をきしむ　陳
まひとつと嬢をそやう彩の月　角
二年と蔦とを手をさうう疫　棠
おろまるを考も友を秋の夜　杏
言みて水をゆける茅戸樋　山
山ちまのてうしてちは静し　菊
鼠みてのつう合歓の二言　角

かけむりに撞る床のいとれし　山
みをなぬ船を屋の汲待　杏
青色やと曹洞宗のうて　陳
蕉子蓼子以ちまを焼　棠
尺ぬちうの主人を毛をもれう　角
すうと半分かくまるを　菊
鼠しに星を敲て萩の角　棠
ちうは赤の寒俗乃　山
松茸を近江絵うはほ山子　角
点宗れてしてけう　杏
光うる八湯寒ちかしう　菊
花の点みうし柄米枕　棠

はさーを中てたふる桜の色　山
初櫻の彩のまゝ　三　信　蕉

源川芭蕉庵

身代をいそくやとしむ苗　千川
小松のかゝら桜も今山　菊
牡鹿蕉鹿の医学をうれて　洪鼎
多吉白子海手ぬる川　左柳
泊る人お旅の板屋と一里塚　酒堂
そゝり年初こもむかとこゝの雛　海鶴
物ウ主ゝ鶏むりゆう丘角面　蔵水
黄除うゝ南天の花　川

笠ゝれ小おゝ安泊りむ雑うみ　菊
ふゝゝと急ゝいさむ大海　嵐雪
言餅ゝ年穿鑿ゝゝゝゝ　桜
居風ゝゝゝゝゝゝゝ海生　筋
鶏くゝ稲ゝ込みゝゝゝすけゝ舵　勢
俗ゝ病のゝゝゝゝゝゝゝゝる　水
伊豆の海みゝゝゝ船を漕入て　川
一枚の法ゝ宗旨ゝる　菊

世不二や五角海々二里の旅　素堂
苔子小角豆ゝ物ゝゝゝ　露沾

[illegible]の[illegible]瓜の[illegible]　菊

[illegible]の隣[illegible]やはり大根　新六

[illegible]　蝶の[illegible]　菊

[illegible]　[illegible]葉

[illegible]　洒堂

[illegible]　素堂

[illegible]　菊

[illegible]　芭角

[illegible]に仮の[illegible]もの　渓石

[illegible]の[illegible]　菊

[illegible]　蕎船

[illegible]　盤子

[illegible]の[illegible]　史邦

[illegible]の[illegible]　去来

[illegible]の[illegible]　文草

元禄六癸酉

[illegible]の[illegible]の[illegible]を[illegible]　涼葉

[illegible]　千川

[illegible]　菊

[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]の　柳　宗波
秋風ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　此筋
[illegible]ゝ[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　濁子
[illegible]の方をこゝ[illegible]　川
多年[illegible]　[illegible]　梨
尼寺の[illegible]尼ハ[illegible]ゝ[illegible]　[illegible]
奈良ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　菊
[illegible]ゝ[illegible]小袖の[illegible]　筋
[illegible]の[illegible]　川
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　梨
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　波
出来合ゝ[illegible]の[illegible]　菊

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]の　砂　筋
[illegible]の[illegible]　川
[illegible]ゝ[illegible]　梨
[illegible]の[illegible]　筋
地[illegible]の[illegible]ゝ[illegible]　菊
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　梨
寺の[illegible]ゝ[illegible]　川
[illegible]の[illegible]　秋
[illegible]の[illegible]　川
尺[illegible]　左柳
[illegible]　梨
[illegible]ゝ[illegible]　菊
[illegible]の[illegible]　筋
[illegible]ゝ[illegible]　川

いそれ亭てあふ諸の題目　杉
三条の橋より西ハ時雨かゝ　紫
茶屋の二階ハ海の楼閣　翁
美しき顔も夫より手をかけて　嵐
うらみの文を化る絵の手　川
花咲ハ又来んの帰る塚の上　翁
雪持ちてきたむ庵さん降る　紫
もろやの在々をいけ申て　杉
只よく浮ゝ手まね吹　牧童
かゝりさて行はたけ尺する柿の乳　翁

さらに子まむ塀の薬さし　濁子
織月いきと火燵すくみ居て　涼葉
供のものまて乳いふてやる　野坡
洗濯をしてより衛の涼まわり　利牛
おもひみをやきもまず吹ある　宗波
ウ
酒入宿の入事外て暖しの里　曽良
思ひ顔の枚のおし今ても　翁
ちかうし唐紫の茶園二度摘て　子
〃も見て家をもくしゆく　牛
伊勢の遊又嬉しをしておとまり　坡
世しらねる花心の浮波　波
重たき火花月ややも八延しきほ　葉

はるゝ和の浦の初霞　良
秋もなほ外てはうし蓍椒　菊
清涼殿すゝきの穂をやる　波
玉和うゝ雲を出しも乱れ花咲て　牛
鶴の様をなるゝふ麻ゝね　子
三吉の松十丈を過れ時しを　坡
汐干をかくをしむ様をは　菊
弩舟の一人ハ法を言やをを　牛
先を拾る為れとうけき　紫
むりうき苗字を長を為て　菊
九はすゝる鶴の様　坡
秋をゝ母うゝ極めう　牛

木綿ふゝ立　菊
是塔ゝ紅月の翁を一すちゝ　子
麻ハふ者の　良
念仏をちひゝ和ハ珠数ゝ　牛
四五十ゝ子ゝ花ゝ左紫　坡
義かけハ麦ゝ伸ゝ雪柱　盛水
為ふゝ和ゝ四ハ塔ゝ　紫
男ゝ迷ハ仕ゝ屋の辻　坡
霧入ゝやゝ雪のゝ　牛
切株ゝ木ハ花のゝ　子
鶴ゝ為ゝ岩の翁　良

五人扶持をたまはり極ゐの
日和しを手をあの吉　野坡
務戒の身をちうに山こゝて　菊
そうをうけつる結子の梅い　坡
吸しをうてもゆかぬ小の道　い
流利のをふて酢をうゆくり　菊
九三手船うゆくるひをして　い
境のうちれをて竹きぬ　坡
去白て松を樫ともの業　い
うき春のうこゝ弱て結きく　菊
疲徳て業を一向指仕春　い

裁入をもとゝうゝれて法　坡
経歴を教うゝする秋夜　い
ちゆ歩かゝゝ月の月　菊
日しゝうゝの酒をゝうゝ　い
ちゝ以佛〳〵新のゝもし火　坡
吹もて十前の芳蕉あゝ　い
ゝ和菜ゝけと指ゝ雪　菊
さゝしとゝゝぬゝ春の風　い
撥かゝてゝ多ちゝし　坡
行義ゝきゝとる俳を教世　い
幾味宿の灰灰ゝつひつ　菊
一撥ゝゝ里ゝ集ゝしゝ竹炊　い

ふと小夜と名のりつつうと海
おえくらゐを賞ひこ中戸さし現よ　坡
れのしの紫鞠をハ若るやむ　菊
市原子てこそ　ようなくきやし
神おもふて花ゆ雪しも以　坡
月うけて小岸仲月のさて伝き
雪麦打ちたる秋宵　菊
えくしと桐の紫花ゆ手多沖
を付てゆる峯の繁古さ　坡
沖とうもおこされて数振り　菊
猫す整うるくて上しーむ　坡
沖の先は黄ぬ工夫ゆ　菊

掃月のこそいろしの味　坡

八丸百おて南海柳す鮎　菊
きの形れそしけるる寿　治圃
部屋ゆ下工て羽形美さ　馬貢
肉えとき つく咲の旅　寿
きのふ ゆ和うるる月の　里圃
物肖うれて風宵ゆ　治
志ふ柿くしハ風と夜行ゆ　菊
除う法とる祖父の傍　里
根ゆこうくて旅ゆる　貢
菊力

蝶 伐 ふ
約束のかた一さけ実る本て
十里はかりはなれたるへしのう
笠の紫子の袋 埋しおもしろき
て夏 計 ゆと 門の 古 住
伐 ふ 切 ふ 伐 ふ 銅 坊 主
屋りと ゆ わ ま 京 の 芝 蓮
ふ 時 て ま ふ 義 の た て ひ て
尺 ふ ま 指 ふ 物 の 大 を は
二 吉 笠 蓮 元 義 れ ら 住 古 史
防 和 の 出 い 向 ふ 屋 へ ふ う ふ 逢
長 指 ま か 岸 の 仲 宮 を い し と

伐 芦 里 伐 菊 芦 里 伐 菊

く く ふ ま と ま の ま れ ま 市 や
線 ま ま 一 ま 出 て ふ 砂 の 上 里
概 の 角 け 大 て ま ぬ 実 穴 芦
候 ひ の ま 子 候 を は ら ふ し 菊
な 紙 ぬ 嫁 ま ま く く ま 内 御 伐
角 ま ち ま 候 笠 前 の ま て ろ ひ 芦
ま ち 紀 の ら 菊 の 久 の ま ま し 里
む れ て ま て 栗 く 板 ま 標 の 市 伐
住 住 大 る 計 ま ら の 紙 菊 里
制 ま ま 長 乃 切 ま 坂 の 市 の 伐 芦
ま ふ ま て 是 の こ れ ふ ま れ る 菊
引 ま て 学 理 ま 学 ま ま ま や ま

手門と共入手義すくるものの
花ハ之和歌ぶぬ事の角ゝ紅て　治芙
潔のしらの不ハ頃茅の水　里

孤屋

宗匠の発句ゝ麦の隙
屋の表窓の付ハ隙川　菊
上張を通さぬ所ゝ雨降て　盛水
手門と歌けハ風の家　中　利牛
病雲ハ絶と移して雨雲の月　菊
雲ゝと塀のこゝろふ秋風　屋
きゝくの茅の穴ゝ時雨て　牛

吹の仕ゝ北ゝ丈するし　水
姉を子ハ雲ゝ雲ゝ時ゝ　屋
信者の絶ゝ元ゝ雲ゝをやる　菊
風ゝ雲ゝ鳥の雲ゝ　水
家のふゝれゝ絶を尺ゝ　牛
鶴汁茅ハ月ゝ家ゝ　菊
茅のゝ白ゝ雲ゝ月ゝ雲ゝ　屋
此雲ハゝゝ雲ゝ雲ゝ　牛
ゝ丸ゝ物ゝ雲ゝ雲ゝ　水
雲の絶吹ゝ雲ゝ紙　屋
蕃茶丸めゝ物ゝ月　菊
不屋外陳ゝ中ゝ雲ゝ　水

[illegible]を上へ[illegible]す　生
注[illegible]の[illegible]　菊
[illegible]わ[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]　生
家を[illegible]　れ
[illegible]の[illegible]　[illegible]
手[illegible]　菊
[illegible]祖父の白髮のめでたさよ　水
[illegible]思[illegible]　生
名月の[illegible]今[illegible]　菊
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　生

山の[illegible]の[illegible]　水
[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]　生
[illegible]　菊
[illegible]　水

十三夜　[illegible]　濁子
小[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]飯[illegible]の[illegible]　[illegible]良
[illegible]　菊
[illegible]　史邦
[illegible]　[illegible]風

こみうち流れて風のあやう
きうを麦をさや多彩を立て　盆水
春をとゆけば桑橋の舞　涼葉
松秋をたづねて拾ふ門　菊
ひとりやもみの木のこゝ　良子
泉は月をとゞめぬ光をし　水
流れてもむ柿　黄ゝし　菊
うす月取麻の衣の新ちし　秋
言ふ月の雲の蕭ちる　風
寺庭を打ちけり秋宜の蕭　子
落ち葉をふる庭の生猪　紫
先汁と雀を呼ぶ　菊

しろひまて帰て敵ちもの
初さ先も指をしとうを一名切　秋
中よくちもむ見ら係元　水
異見を庭ら庭の竹て　菊
新ちい仰をぬ鶯頃の毋　紫
巷ある庭庭の牡丹を帰る　秋
鶯をつしもむるをられる　風
笠ちん柔の五ちみのもし　水
竹ハむくて河ふりう　秋
よられる石を猫雲ちを　良
伯母の注ら酌人かうけ　菊
ふの月寄柱の梨の種うけ　子
良

枝もく菊の折りちらさむ　紫子
露霜のおくとなりけり菊の葉　良
流るるかをめるけつる青瓜　水風
初秋八月のかをしのぶ　紫
かりしの扇はなをくるる雲
花千きさもの秋かくるる雲
をやの海金のをもをもて　秋

菊

十七枝をとりまけ雲のくもの外　濁子
新泉のはるかをかくるさし鮎　盛水
をを花千鶴陸物をみ仕て

肩の枝ひしし朱の杖　依
見えをとは五松ゝの巡り外白　子
青葉葉ゝ色の河をめぐる　菊
ようつきの手を女房の点なき　水
枝すゝめすす山伏の数　菊
若葉をる手はめて宇鶴なり　子
をゝしの舟ををの方をきく　伝
影の葉ゝ葉をかゝの手ゝて　菊
化物必梅掃部すす　子
椒の枝おろしをゝ雪の月　水
蛾まちうけるの義入
ひゝ住をを作をきけり　馬蒐

うゝみそてゝやゆ琴笛のかゝ　菊
ものゝ十ゝもゝ色ゝ花ゝさゝう　菅良
瓜を之ゝゝる物語の源氏物　水
手紙を清河の古人に詞しゝ　芦
之ゝ手のゝゝれハ元ゝかくゝゝ　菊
指分ぬおゝ月ゝを右ゝかゝゝ　子
ゝれハゝゝねゝゝゝゝ歌　良
文川ゝゝや青の袖を端ちゝ　宗葉
色祖のやゝゝゝ月ゝを見ゝ　る
香立れゝ米の葉を接ゝね　菊
月ゝ大ゝゝゝ月ゝゝゝ　葉
雨化ゝ姿似ゝゝゝゝ水ゝゝ　子

大原の俳屋里子久しき　菊
数おゝくゝつゝけハ生ゝ富ゝ　葉
ゝのみゝゝに鮓を　子
初時雨六里の松を待ひ木ゝ　菊
むゝ年雑のいめけゝゝ　葉
ゝゝを水鏡の起すゝゝめし　子
笋ゝゝすゝゝゝの土ゝの色　菊
ゝゝゝハ安ゝゝゝゝの山　葉
ゝ鮓ゝゝすゝ岩の白布　子

仲冬月廿日泊川ゝ即興
振ゝ社原ゝれしゝゝす海　菊

野坡
孤屋
利牛
坡
翁
牛
臼
坡
翁
坡
臼
牛
坡

翁
牛
臼
坡
翁
坡
臼
牛
坡
翁
牛
臼

又沙法師よりもとめ給ふ　坡
やうとうと大路なる四つの道　瓦
昔者のよりむ林の紅葉　牛
中ようて信者合の信いひ　坡
望をしうきをしうきをぬる月　菊
風止て秋の野辺の尾さうう　牛
解の咲るの蟲をひうゆる　瓦
ちゝはゝと茅の扇場の月　菊
月遠方のうのまの移ちうへく　坡
何おもかと花の三月中舟か　瓦
梅花の蕾をそうふ春風　牛

芹焼や紙梅の四升の酒　菊
こうて手ゝ云るうむ餅　澤子
職おろう縫を延ひろうて　涼葉
形しすむ蕾の柿の木　菊
うす月釈手解ぬうの腰く　子
濕るむ生るを尺しぬ翁秀　紫
家雪の小村る紅をしき入　菊
枝の末ゝ移る信者蹴　子
ゆうゝ飛去れ柳の毛紅ゝく　紫
塚ハひゝ泥ゝ踏ぬ石京　菊
り蕾ハ孫ゝ吸角ゝけきて　子

和田秩父もひとり居堂　紫菊

掛乞の来て八詞をかしける　子

よそよそしき角の枝折戸　紫

出入もしらで聾の庭れて　菊

松もまばきよ念佛のこゑ　子

宿八粉いのちうちうをのうけ　紫

彼岸八さ夫婦ふすの寒　菊

重箱はきやとふれて　紫

白粥つゞり一帖の残　子

旅寐や長むさ夏の紅海　菊

名殘をのをく安藝の屋高　紫

雪作八尺〳〵如伯母も悔〳〵

元来そうの酒より奥屋　子

燒立て寒子餅する雪の角　菊

雪ふる〳〵まくも加賀も酒　紫

大雪舞八侍能夏子新ひて　子

うれ行屋の前て走る　菊

よ〻行と粉〳〵をかめて後雪　紫

紫蘇蕨蕨ふ床のかゝ湯　子

冬すゝ〻と蚊帳を釣うれて　菊

冷なる〳〵忘れ酒の約雪　紫

うすすの上子の〳〵れのこゝろ　子

俗の寒ふ〳〵く美　菊

形花子子供のすゝる雪　河　紫

さう松植るて。外の書子

音菊や野菊のうつる白の端　菊

きりてくるりとさし大根　野坡

夜長ハ夫をく橋を掛初て

門子孫ものう月の名ぞうれ　菊

やしりも秋のう寂のさんさ哉

此一句ハ栗の味手貢　坡

七十二あるを悔ふ脚技拍　菊

三尺通り蓑のさしうけ　坡

涼しさや田の出場をくぐる　菊

拙なる生社方紀やまむる　坡

墨染千ちのそとうの入　菊

千ちうち家る旅の芋　坡

押洗ふ泥の足を嗜うあて　菊

鉢ち鉢鉢付て野すを節　坡

田の中ゝ場をぬ石の手師　菊

笠ちうを付くく月紙ふる　坡

花の角祖父ハめて殿ちれう　菊

結ちく宋ちすまの義本　坡

陰坊ゝ青の鉢仏を引ちし　菊

ちひ廻るるのようちて石和　坡

書合を松敷のうる藪の岸

坂の話をいふも露又
手ふるまひ人足の樽のかしらし
注て酒のむ所作うるの菊坂
賀うしと極うる風のゆうる吉
弱めず人の魂を菊やる坂
月又れハ祝て不足の如其心
うゝれて寄ハなるかゝ菊
仮工勢てなるハ緑繰て坂
仕付て寄ゝ寄方の言菊
田を極うむうひ近江の稲のゝ其い
て寄うゝ一宵の祝ゝ坂

此中蕉翁不適意句又故不満韵而

終云々

生ふうゝひゝて水ゝ生海鼠孔菊
菊けハ月ハ宗菊の蕪鉢水
代古の仮屋ゝ菊の月ゝ見て菊
屋風孔桶の梅を入うゝ
酢の物を拵れハ酒の引て水
うゝふゝ越てうゝすゝ言彼い
歌の時又中ゝ醫者の義孔菊
雪ゝき新うゝ屋のゝ水
香箱の一つゝとゝゝる松ゝ菊
旅うゝ物の酒ゝうゝゝ粥水

麻衣を引ちらす本葉の谷　菊
中稲の穂にれを吹ゆる風の音　水
何ふもかも写さる海て月清く　松風
浦々の島山の秋の雨けき　水
造てきて村を呼て舟の海　風
引けしをとれる波の音　水
初雪のさらふ雲ハ高くして　風
伊賀路出る山のうつ見る　水

いさみを奪ひ引ちらす風の音　菊
おのれのみくる枯ちる葉　浩園

馬蔓
三本線さけるる旅の宿　菊
夕自然宝玉をつみて文しける　恵
ふすまこそ秋きふきく　黄
ウ
野ゆ家と浦の秋きふきく　菊
大黄の紫れ幾重ちる　恵
力なく紙わたしてしらべい　黄
張ってすひもみむ木陰まの　菊
村仕事ちらきを張しむ　恵
ゆりきをいのしてさけ　黄
弱の張十二ちゆ　菊
伊尺の格をの京の名残り　恵

悟へ入る支羽根
就仁しとられうれうあり　芙蓉
月七の青うし仕也ようを皇麦　亜
吸先ようして錦ハ破　ろう　芙
深夏のとくしく歳ろ麦の風　翁
門の古うハ史　籠いたさる　亜
竹の百三一切ろ商の海一通ろ　芙
蒙ようる雑毛をもちまま悔丸　翁
鳥ようおれおろうハ知うるさ　亜
雲の河江の山を元まく　芙
入ろそ松さ月くしの竹　翁
仏法安を徳ようけすと　亜

五紅の小袖ハ縫のあうろて　芙
異洲の系瓔を麦手もさて　翁
ろ月移の二時を在ろ冥義　亜
月を曝て癩病をきく　芙
紅ろ物の一雪ハゆる七ま　翁
増て孤五る柳るのきろ形　亜
秋の点乗しいう赤切志　芙
幸加帳ろて つうぬろう　亜
不ろ俗ろも咲山の新三位　翁
四今の谷て ろ麦ろ　芙

雲やちる宮のこゝろの阪中さし　松風
刀の柄手　おろす　拭　菊
白うるし木きるゝ所ゝあらけて　盛水
秋末てうちうの弱巻の塊　依ゝ
初しハ布をあをの月　置良
研イて　拵の市　判　菊
高きに手を紫の孔をさゝし　水
阿うしむ麦ハ手のふうさる　野坡
白檀の梢ハ　る　林　て　風
数をきうてを　巻を作うて　水
焼筆の物天のむ　押すて　菊
もゝひよきもゝ　金ぬ　良

藪ゝゝゝ作れうおを　柏　風
出家ゝ物をやう上ゝ　し　坡
汚高ゝいゝゝうちゝの月　良
ゝ茅の汚のさ先しゆく出　依
初むハ蓮掘ゝゝいゝの孔ゝ　坡
塀のつく木ゝうゝひすの汚　牧笛

いゝゝみを雪引ゝ　里圃
茶のゝゝ紅の雲ゝゝ　芭蕉　沾圃
大根のゝゝぬ去ゝ　菊
上下ゝも手　茶ゝ　馬莧

四きりに月人の徒の集め弼　法
荷うちうしと通る次　里

まうれしかりて撰ぶ惜しき　廿角
長陳もゆう弼の石
出代の荷物を手うかさう　菊

梅うえや通うられハうの声　毛紈
出元弼う　神　る　許亡
弼岩手の知の生の抜ぬけて　菊
春風や麦の中ゆくまの声　木導

弼きいまれ花は糸は　菊
出元弼や音の弼うと三ケ一　利平
ちうえ　やく結るの細かう　盛水
蕎麦うと麦業の清ちうきう粉う　菊

野ゝ口之圓うう母方ゆうう人心
弼う歌此日を手うゆうふ仍て俳号
を弼うふ古俳を書ふ
雛ふて名家をふのう人を外
実桂の撰うう　咲　法圓
麦うの角て来う戸を分て　菊

古將軍の古宅をとゝて
月やとの昔の木はたゞ
旅人をれハ折ふしの
ゆゝしき迫文の樹て来て　菊

雲の松折にくれハ折まゝ
ものゝ哀ハ秋ハ来ぬ　孤屋
二番を一船清き折ゆゑて　菊
百とゝきゝ大りの俳　子珊
月ゆゝ風ふハ高月秋　桃隣
葉をかゝまて唐衣島　利牛

菊　雲命
ものゝふの大和若ゝ
一通ゝゆく木うゝしの　舟竹
哀枕掛ぬ神を織て　菊
火ゝゝゝくしゝ古且秋の内　命
物の葉のすゝ言かゝて自の色
ゝしゝをえをし物ゝ小雪哀　竹

元禄七甲戌

梅ゝにのゝとゝの小山後ゝ　菊
雪ゝゝゝしゝ終ゝの峰ゝ　野坡
哀夢語をまゝのゝすゝ哀ゝ

上の句より千万の米の直
千万のうちはしらしとき月の
数こと嘲す秋のさびしき　菊
お所へ菊もらふ道遠さ　坡
娘をかしらふ人手ひきぬ　菊
東京通ひ同しほうの羽書ま　坡
とし小雨の降ぬ白　菊
鉢ふる味噌ふやる白川茶　坡
ひとしいもあまお袋のとと　菊
ま寸ふる尾の杖病をおさえる　坡
蒟蒻はうぶ砂ふる名　月　菊
初尾を掛ふ尾蕎と尺ふ　坡

あるをおもふ居合一めお　菊
所宗の法ふと破て花のうち　坡
門て初さふ生の言伝　菊
ふ風ふ業のいまれを迎し　坡
只乃ふまに脇ふふ　坡
江戸の方句の寿ふのわれて　菊
ふふふふ以れと雑をふす　坡
方こ十夜のふの陸の苦　菊
桐の木ふふ月さ　坡
門ふて月つて寂ふ　菊
拾ふふ言ておもてふ　坡
初年千女分の親ふ旅菊ふ　菊

[illegible] 世 [illegible] 人　坡
世[illegible]の[illegible]を[illegible]花さう　翁
[illegible]を[illegible]て[illegible]の[illegible]本　坡
[illegible]の[illegible]を[illegible]の方[illegible]を[illegible]
魚[illegible]の[illegible]の[illegible]　翁
[illegible]一[illegible]　坡
[illegible]を[illegible]　翁
[illegible]を[illegible]て[illegible]　坡
[illegible]の[illegible]の[illegible]菓子[illegible]　翁

[illegible]の[illegible]　翁

牡丹のもとにわかのむ[illegible]　千川
みしら歌を自ハ[illegible]　涼葉
[illegible]を[illegible]　左耕
[illegible]ハ[illegible]　川
出口[illegible]の[illegible]　翁
[illegible]仏[illegible]枝[illegible]お[illegible]　板
いの[illegible]の[illegible]　紫
[illegible]の[illegible]　青山
[illegible]を[illegible]　川
[illegible]の[illegible]　翁
[illegible]の[illegible]の[illegible]　山
[illegible]ハ[illegible]　紫

すのこもはをハえ乗しく　板
巡礼の時て旅ぬものうち　川
見ようと見て清水へ参詣　菊
花見んと出る谷中の時分　山
くるくハ梅の手さかりの頃　紫
ゆるき海路の春の霞を辿り　菊
ようようくるに本の姿　此節
海上の浦に千写をうつす　紫
宝の袋に入る小判　板
きびしく積りをかさね来る　節
夢のまのれハ白川の山　遊糸
萩屋事実の栄をかりうて　川

海原の門をしく自の秋　紫
人見の費用引ゆ茅つゝ　大舟
ふを知れて笑えきうう　菊
笑もうとうけさひ　死事
海もうう雨ときく蛙の声　糸
隨分のかきう矢並をつくろひて　節
火手かくやき門の孫物　板
院内手守法門をふ法の等　舟
喇とまれてやまむ　紫
此まハりうう事実の為　川
地のせいの尺海の苗代　菊
糸

[illegible]を小屋の名や数　菊

[illegible]より雨[illegible]仕う菜　信　子珊

[illegible]朝の[illegible]三の[illegible]　枕風

出芽のおそ[illegible]　桃陳

けんこと[illegible]的さふむ青　柱　八楽

楊[illegible]　又来る　菊

[illegible]　珊

[illegible]　風

[illegible]　陳

[illegible]　楽

山のうふさる下市の　里　珊

[illegible]の仕しハ旅の音もの　風

四つの角ときまるとかたひしれて　陳

秋来てと寄の古れひしれて　楽

雲雀の羽のとくえ　桜の寄　菊

[illegible]と足のようなる花生　珊

ひらくんひ[illegible]　風

二月の末ようなかすみ　陳

めれしる信を[illegible]人庭の　楽

屋の風寒[illegible]　菊

五つ[illegible]ハ[illegible]る　女　珊

[illegible]陳と利上又[illegible]に[illegible]延　風

[illegible]ん[illegible]ハ鶴[illegible]
[illegible]れ者を汁[illegible]入て　楽
[illegible]ハ引[illegible]む　菊
[illegible]の自　珊
[illegible]麦の[illegible]　風
[illegible]て　楽
[illegible]人[illegible]　菊
[illegible]一向[illegible]　珊
[illegible]　風
[illegible]自　楽
[illegible]　楽
[illegible]　楽
[illegible]　楽
[illegible]　楽

小舟[illegible]の山[illegible]　桃雪

[illegible]　山店

[illegible]麦[illegible]　菊

[illegible]帳の[illegible]

[illegible]の[illegible]　〃

[illegible]の[illegible]　店

[illegible]の[illegible]　〃

[illegible]の[illegible]　菊

[illegible]の[illegible]　〃

[illegible]の[illegible]　店

[illegible]　菊

湯のふるさとのかゆむ　南　章　　店
丹波うち後うきはるてゆく一鳥　　菊
そこ雪の事れと利上きへさぬ　　店
ちよ山ちて蕊雪と初ひたし　　菊
兵　京　中　ちよ　ちきえけ　　店
神　四　ひつうとしかぬをあ　　菊
きかうち歩き雪ち紙れる　　店
奥の花をつくしもとき　　菊
りさうひうひすれ年　　店
東のち春雪のかめつうと
かくしや河清うむ
いそうくれ役えあうい　　菊
　　店

月つきのあ年あ礼清し　　菊
かうひうち樫ちやしまの春さ　　店
佛の木泥を清ちむ糸あて　　菊
うんしと白ひをいれ　　店
うちうち竹のうち牛　　菊
胴二帝のはうちやて物ひ　　店
ちうは外ううは神せ雪する　　菊
鶏を文めちやれしの月　　店
えうはを蕎て山菊の雪　　菊
白光く丹かうれるう秋の去　　店
うれしうちのむ米の事
又見ち蕾生ち雪ち砂ち月　　菊

物すさまじきさまる夫月　店
花のうつろふ小野山をふもとさ
ゝ
花ゝ発ちまさる黒谷の色　菊

多賀城碑を人々見て作侍る　菊川
苗の雪とし年をかけてむ　素堂
紅ふるふ金殿を吹立さ
大手の門くいける生ものの　菊川
さゝやき霧ちる月の秋　笑
ふりきてうつる旅寝の夢　笑
紅作るうつろふ初しぐれ　菊

豆腐味噌汁作法　川
尾張の孫とうゑ菜を煮て彼　笑
雨の後ゝを生ける　菊
施孫のかちを苦しむ塊の河　川
蒼を共上て門子陰ける　笑
切麦しゆんとうゑ菜あり　菊
お旅の宮は涉を青　川
うゑ宮を祠の行るゝ　笑
初ゝ行るゝ家の秀　菊
咲ちる二絃を聞人　川
折ひしゝ行る五月雨　笑

生流れ村のさゝやき有明
青紫吹ちる梅檀の花　吉来
一枝のむしろ屋窮れかゝて　菊
栖もふ庵も古き紙さし　惟然
有明の月の生海苔のいろし　文草
堤切てい田の中は花　支考
紫しおあよ牛蒡の宮うて　東
お齋ハ月の十五夜ゆる　竹
秋も長き釣り舟　無
乃ゝ鳴の山ゝ青ゝ浮世　野明
地曲て松原ゆゝ　考

風竹

功ふ人ゝ魚ゝ
雨気の青ゝ系ゝ
紡芽ゝ
雑魚ゝ
青ゝ
花ゝ
水ゝ
二川舟の渡ゝ
堤ゝ
雲ゝ
茶ゝ
世ゝ

菊　学
無　竹
東　学
考　風
考　竹
東

[illegible] 菊
[illegible] 然
[illegible] 的
[illegible] 仲
[illegible] 東
[illegible] 菊
[illegible] 然

[illegible] 的

二月廿三日

[illegible] 浪化

[illegible] 玄来

[illegible] 化

[illegible] 東

[illegible] 化

小石一き蓮の株のうゝ　河内　立本

謂分のちまりしと起る立花の

梅咲て色と花さやうに　化

手中を松の間より斜理嶋

伊勢の海のいそうき実　来

上州の木綿合羽かさ指さ　化

海原の春まさ八さうも

名月の指物五手すくし合　菊

一分てさもの梨のきれもの

玉味噌の作法ようの秋の風　来

不見丸ちを学理おすゝ

坊の春の拝ひ次第ゝ作ゝ来

点うけてやゝ　化

此指を見て通る船の軽　菊

青田うねりて夕立の風　来

雲めるる原を鳴る水場　化

陸仕をさきて丁士ゝ合ゝ

月ゝ鳥の塩物を星ゝ尺ゝ

野夫棚ハ上ゝ霧　虎

志のふ写を踊りもとゝ

青ゝうゝすゝ青の傍　来

笑ゝ八望ゝ沖ゝ

月ゝ鳥ゝ鶴ゝ

長ゝ松ゝ花の咲ゝ

本

四五人通る俳長宗為　化菊
菊を河のる俳の繪古社　東
いつくもまつ志ゝ寄の中

紫かゝれをうけぬて瓜の美乳　支来
世松子悔の時を立る寄　浪化
分り為者子撰の人と嘲し　菊
ゆとお俳の はゝひゝゝ　之道
は冊れ花のうゝる角の入　文草
火のゝゝしと燈て良　支秀
行はゝ生ゝ書請者　惟然

見出ゝもう見をはりむる　野童
切をて番見ゝ丹波山　野明
ゝゝし命の変物　東
家冷ハ餘のゝ水ぬゝゝ　色
希ゝすけ行雄のさや　学
ちゝゝゝ風ゝ家拔て戸を敲　秀
ゝゝゝと我く秦の紫　然
砂川の海くふゝゝ夕角取　童
家志ゝれゝも牡為ゝゝく　吟
百歩ふ花の木ゝけの店屋物　色
業ゝね餘ゝ函を見ゝゝす　東
ゝ内ゝ撰業ゝ主事の長　学

獵師のうすおもむきを
彩の間あるを手にするをおもう
俳つまびらけて什物すなわち
用る板のうすし一尺二寸ほど
僧上しるさ高しぬる
茶小紋の十徳のすんなり
手ぶさんさと秋八月
此夕身を知るとうとう山ずとう
物うるさけの四月かけく
面倉つく秋の高のはしと
あるいは朱しるる市の小屋掛
此うの代物さふし寄せて

芳
然
壹
的
花
来
学
芳
然
壹
的
花

五十七

舞とく男 計ふるうる 接 移 芳
お屑の里 ハ一 ハ 作くみ 学
塗うと 家より 物のむし 入 菊
花の色は走くく 出ぬ 宝迄 然
なこの 一 なる の 物 的

閏五月廿二日 蔵 柿屋 紀吟 菊
柿屋 紀吟 八十 し 和吉 来
百引 移 より 其中 の 稈 洒堂
村雀 里より 家 むけ きて 吉来
塀 うけ とす る 石 頃 支考
角 ぬる 川 ふ ふくい 舟 の 編 文草

小いとうれて行手出つく　恒然
上をとをてそうゝ後さをふ堂寄
手桶を入さお遠りの法　菊
疲るも食ハいけものをくを　末
大工の野ゝ手張をうは　秀
外樋のまは掛る屋敷の先　然
仮ゝをまちて酢はれをやる　堂
降むいさまゝ雨のさゝと　芋
題しやをゝ　末
お鮫を焼と鮫ゝ南方手　堂
ゝろうを元ゝ樫の木の森　然
月花ちひさゝ門をかけ入つ　菊

業おろす吹の上ゝ鮫　板　堂
阪をゝねゝ字付ゝ磬志の供　芋
新茅のかさのゝとして来ゝ　菊
代口のゝゝをきけと格むして　堂
遠ひをゝのむゆるの家縁　末
うすをの一反ん庵ゝ海ゝ　秀
沖おハきんと次の田示　菊
おひゝゝの弱ゝ前のゝすゝ　堂
陳のゆ屋ゆゝ　然
蓑礼の竹ゝ所ゝもそゝ竹　末
まぬゝひ祝ゝおろすゝ生の菊　秀
りひゝゝ渡ゝ意志ゝゝ　菊

吳子のさくらに田上の尾
正月もいまやとハさびせぬ　雪
拾つけよ赤ふしの名代　末
吹雪の行ゑ迷ふ埼松魚　然
ひうんをうけてお降さやく　芳
白粉をぬれども地蛭以就　秀
紅赤拵拵のうれのもやもの　末

夕うれや夢手埼をとる文也陽　百有
明方をふきくず数の云対　翁
ちらしと法螺よ沙魚の汁をうて　惟然

野明

百の中さうふれ手人さ
一貫の孫て海うふうれの月　翁
鯉千鶴蓼ふ庵の坊ふ　然
松茸と小信杉ねハちられて
かふるまもく人手かして　的
蕎麦の汁きふ紙屋のれ的て　翁
旅の旅老手原親さ　然
まのひらけいひこと伝呼ふ紙　的
その百手いくふ食きて　翁
先ふくと川ふ意ふ寄の　然
常の味ふ六氏さとの稲　的
月新ふ名城の海ふ有て　翁
然

[illegible]の[illegible]くあるを初瀬の晩鐘　的
花の[illegible]年[illegible]ぬ[illegible]のいくもとを　菊
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]年[illegible]ぬの[illegible]　然
[illegible]伊[illegible]社[illegible]年[illegible]科[illegible]　的
[illegible]の木をすゝ[illegible]と風の[illegible]　菊
[illegible]尾も[illegible]ぬ[illegible]ほく[illegible]　然
[illegible]と[illegible]を[illegible]の[illegible]の[illegible]　的
[illegible]しすゝ[illegible]の中　露川
秋も[illegible]ゆ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　如行
[illegible]点の[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]て[illegible]　松星
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　夷始
[illegible]　的

木[illegible]抱[illegible]て[illegible]く[illegible]　露川
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]て[illegible]　姑
[illegible]ゝ[illegible]　星
[illegible]ゝ[illegible]　川
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　的
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　星
[illegible]　姑
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　的
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　歌
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　雪

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　有

西日をふきくる藪の六月　菊
ひしひしと海鼠の腸を煮て　惟然
雪のやうなる人し　野明
一貫の陶て海をふるれの月　菊
稗を縫蓑を庵の時雨　然
松茸を小伝授ハ中ましたる　吟
ほうさえる山を人ことうまし　菊
墓石の清きを新屋の口ゆて　然
旅の袖を手扇瓶をもす　吟
まひをいふてハ亦呼れ　菊
七の百千ねの度志くるる　然
めきしとりうをたるの寿　吟

朱の味ふ丹里の稲　菊
月新なるしの海を高うして　然
夢の松くるる泊瀬の入お　吟
花の糸を時ぬかるのいくもをう　菊
大ようねうくるる牛ものの時分　然
二　鳴ゆる田舎伝者の菊は通て　吟
伊勢の味を料理先うい　菊
松の木をすうくと風の吹てう　然
風を酔くぬ意をかくて　吟
うとしと松を思うう思を砂の内　菊
豆腐志うう一つ盆百の月　然
美しきお城廻りのうす取菜　玄来

金胴いろくさ　芝原の雲　之道
野ふて汐焼うすき色釜の芋　吹
汐色の役手しぬ面影　末
多ふしとを波入ていまぶれ　然
松のみどりのまことしとて　吹
ふし雑の歯手ちう二人能　末
つきいさ　色の赤坂　然
手所しきのふの平ものうそ　吹
梨おしとをお相形る底紬　末
新波なる花の新所まれる春て　然
みそさう　板山　吹

之の形やうにて的し冷物　翁
春そそうそうとと釜の板先　出翠
釜ハいりのほとうと入て　所高
古む葉篠又反赤相しこむ　惟然
月影のうとをうる釜の芋　文考
志ものて強をとけ芋舟　翁
物を物塔のあく地い通し　翠
ふうう石子芋を去てもう　言
飯糖ふる面橋ふさ火打強　然
きて工夫をしう四　降　考
おれうるの高ふまて格の香　翁

村佛の魚子多なるさしうむ
雲雖千葉を重ねたる紙
秋風さらす門の花盛
丁寧て紙に和る月のうけ
尾紙てつきし元の葉ゆる
餅屋のこゝの葉ゆしられて
示月ちらしをうさきさ
寺風を葉ゆいたりいさし
義さう村へ物けの書そ
ちひうの如舞も男をいきいさ
月をの対る山伏をかる
宅苞を棒子仕る狩客

うゝいさうゝ和月雖の京
お布と話先子ちう矢木の所
源のゝ子きの寺をひ
左さちを子をきお酒の引をし
先寺の家を無功りける
射付しゝ家まさる月の寺
そちゝ竹ゝ家の上舊宮
法筋物四家の角の法京所
寺俗をかくるおりて一固
今の方ら捨をゝ尺法ら格の上
大きゝ乳雖のとんそなゆる
生ちち切をも尾おしをて

[illegible]友樹の下　方

[illegible]と拾ふ高十寸の蜂　菊

青葉ふちつくく久しの約　安世

波を蓋す舟うつ[illegible]尺迄て　支考

くゝられて家を化に京中　空芽

月の高浪の松を寄て来る　太祇

大寸虫のゆきてうく蜂　丹野

かゝうさをよめる秋の蛍　芽

直うく咲る人の[illegible]体　菊

さりくと物を気分て書を結　去

秋の暮ゆく[illegible]む海原　考

以まさを付るをうれして　対芽

去向の[illegible]を吹て　芽

雑把るもすの[illegible]の上　菊

きるゝ江戸の[illegible]の末る　路通

まいとりていけ[illegible]中の恩をきく

ちつとのるる枝ふ[illegible]く　說

月を紀の[illegible]かしこう　考

ちつけうとの猫さうり　砧

石垣を[illegible]もの　芽

背よけ伸しふ悔[illegible]つふ　去

こくめんれ伊[illegible]方寄て不斜　考

中略ふるまひして手に持る
絡帯を孫をたゝきて先うゆく　雅楽
名陰の所此を付も見る　菊
的月の餅と書る事奈る稲　葉文
とし八いうゝ　道
萱蔭八きつゝ　安
いつ仕て　秋の月　秀
女郎と出ゝ　詩を上る心　雅
尾を乳武士の二番をえも　雅
去る家の窓竹八枝を伐ゝ　雅
四方を時ゝ　文
故の形ゝ人ゝ二坂　雅
徒婦と名を付て居る　菊
病ぬ時て詩句を見る花巷　道
望ちゝく白をちをとんゝ　雅

六月廿一日

秋ちりぬゝ　ちのゝ　やゝ四季ぶ　菊
志とゝ　ゝ　此の雪　木節
月詩る秋ふ　の大新歩清　て　惟然
起ると深ゝ　ゝ　ゝ　支考
海ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　菊
まのゝ　ふゝ　ゝ　ゝ　菊
夕坂をくゝ　ゝ　味の猪を　待　秀

何の家もいとまめ大きさ　然　翁
有りて世のかたる宝峰さま　芭
うちし雲の中ひろう霜　然
仏檀の傍るに月のさしうつる　秀
深うう見れば秋は　芭
八幡の礼はそこしれぬ高う　翁
舟宿の鮒の財ふるうて　秀
西国巡礼はいたのむる雲　然
持ちうすする醫者の手尾　芭
陸うけて西瓜の蔓の延　秀
辻袋枕もむすぶ花の垣　翁

かくまうあるよう紙をふうう　芭
行燈の上うちうち新しき　然
夏の茶碗をうりうと豆　翁
半芭蕉八四面を尺ゆ　秀
竹の根をいりまのさしし　然
ちさしと立の柴柵を巻い志　芭
時とむすの先手つはをこく　秀
立八うれ立くてうう火燈の百　翁
至ゆまれうう物さいすし　芭
数敷て書こもつはの釣月数　然
木手十とうう林をしもむ　翁
満化手中稲志ゆけて時ふう　秀

桶も盥もあらしき籠　然

板おもそろ敷て猫の通ひつき　苦考

そ手物をかゝふる棕櫚は　菊

花咲ハ茶摘そしかる素の山

清くしの船ろる赤ちの岸　然

松茸やしゝあ市柴の屋そ付　元代

秋の名和ハ家しかゝ寺ふ　文考

宵の有河原の花を中ほしに　雪芝

そしハきけハ里のうま赤　猿雑

四五人て茶ろそ作茶能古夫

いきうし弱手鶏を至ろの　望翠

そウ多の重ぬろよハ人の寸と　惟然

屋風そしんし結ぬさし　卓袋

んて上州米の元さ大ま　代

そうまの高もろの金さ　考

嵐山くふとんの上の幸味そろハ　芝

風手ちそろ八雪す雨　鍾

いそうき作ちくしい木茶屋　聚

三手ふそと嫁うるの寸ま　菊

雑のそろおハ人手ふうそろ　袋

きさそそそそあ仏ゆうつく　萩子

初せの垣手古作弦地し　然

[illegible]ぬ角の細さ　代　袋

けうしと結ぶる小ちの枕とされて　秀

糸うの色へも豆鼓屋のり　雄

手切のちいさん鳥手角を入　子

居れるの湯のうめが臭よく　秀

二三本伐しれいかんうと　菊

老宿の燈篭美丹小屋　雄

殊られて枕ーしる琴の弱　芝

花きりーて什る仙　代

味噌屋の青ちうつとて　袋

木綿を蓋子はるぬ[illegible]　越

ちりもの家の物も掲れ蕃

花をえしけて尺湯の雫　子

秋八幡の[illegible]れを炊ひて　菊

信と信とのさのるし　翠

呵る行ようう焚付かんの云　定

焚きう入てる屋ふやける　秀

花定ふ片咀ひのいて吹　雄

まちの南ち屋の太ちうめ　代

七月廿八日猿雄亭庵席　猿雄

炊れて寒ち湯ゆく蛙をうの

野のかーしをゆくう栗の雑　菊

紅月和燈ちう湯かひはるて　配力

菊の名のいと多き故に能の
うのうちと物をおろそかに取
きくうちにさいに物いし
婚礼のちひさきやうやうと
ゐうと地にとえとうる船
焼食を割てくれの冷くて
おのれ屋てもぬくうの
ぬてうへ肩の麻ひし
相手のおまて自をくるさ
紙をのふ屋のうをはるし
角力のやうけていくて
ひうけ山伏村の一かたた

望翠
丑芳
真袋
菊
桃
翠
芳
袋
木白
力
桂
菊

とりとうかてし村の姉の菓
樹さして染ちうるの花の武
去うむさりまの相まい
俗刺の川除の石法をかけて
な南しそ之みえかの
大名の供の長さの宋とあ
命ひの嘗のおうう血の色
一升を伐をて麻酒の物
響の長子あしもにより
徳大子華石 河辺の板ハ矢
籠の者 代 相もの先
第 木を節の生て義こし

袋
芳
菊
翠
白
力
桂
菊
翠
芳
力
菊

千かさねの衣を着る事月
外出の時供を召て上下とも
きらきら敷物に成て岸に
立ならべ成すること新し
かたく〳〵さいなる事なれ
耳傳をうけて模様きも
約束の意なり
大きなる頭巾の花の
宋の頭巾なり　二月

経　翠
袋　菊
芳　経
翠　力
白

望翠

作ものと第をもて板賓小

牛のそうもを細切にして
約束の雑煮を祝て
まれハすること豆腐を
大八の酒をうる鉄小鉢
の毛の鳥をうる編笠を
疲をうる代ひらく川おもて
地中に生を魂かくやる
踏入の赤をうる門まをう
杖と多履を新して
一位年〳〵きさらぎ月朔日
髄脳をかなをの酒
大きのをうて四月晦日

惟然
去芳
雪芝
旅雄
菊
車銭
九節
芝
翠
然
経
菊

寄麦粉をふるふ性るの旅　紫
之おりうみ　さしをくえ尺寸の湯　雑
殺　粉をもて祖母の陰　る　菊
吉ぬ千花の本うけの一輝　芳
ねすやうにてむ　まの小風　雑
旅籠屋とひとうの手けいを　芝
うひのとろをかめる信　紫
角杭のれ手母をむ寄屋ひ　菊
ちちくまれハ店風のもう　芝
打捕の一百　落子をいうる　翠
あ家つうくハうれ仕うハて　芳
青のと入うれうる花手市　芝

第の青とろの助ろを小家　雑
百うゆれハ又尺さくるの絵　雑
ちち手手ちる魚坂の　秋
在ゆ手志付し隅て丸ち　紫
門寄　ゆ回ちう　敗角出ち　芝
引之し為ちて至萩の門　芳
ひちうちうちうこふ古井　芝
ふうしと絵寄と付ら貝の　雑
いとりくさんのつくる風　雑
さハしと寄の陰ちる大多先　翠
板ちゆしる古の芝松　紫

陽の姿を捨きもよる新年や　雪芝
餅着ふりそそぐ年尺とるさの船　菊
夕角の光る梢ハ実をもてる　古芳
うす柿いろと吹る霜　風麦
身をそくめ二人連立て巷　玄角
こゝろ付至る雪のゆけなの　苔蘇
蝶蓋を用利のうちに付て　菊
狗し号き門の鶏　芝
大木の梢ハ枝のうち　麦
時を麦刈して　芳
山伏ゆくゝ巷本て礼祝る　蘿

一雪ゆてゝ枯をとる　角
掛物の布袋の腹さて　芝
百の魚を引きて　菊
秋風の面かるゝと川の上　芳
かゝる荷ハ舟を先ゆる　角
美流山ハ弱ひて能の吹物ひ　菊
ゝゝとすゝる新の書の形　蘿
新宮の弱る朱ゝる切目梅　角
ゆゝれを引ぬゝ面のしゝ　芝
のゝれぬやゝとゝゝハ本数の末て　麦
紫樊ゝゝゝと新迄ゝゝゝゝ　芳
竜竹の杖のふしゝ光の業　蘿

しぬ山ぶを[illegible]やうきて　申
[illegible]ゆうすきを見くらす時雨　芝
花のうけ年　松る梅さ先　菊
雲ふるれや有なる詩を人さ[illegible]　芳
雅花のいそれをかさる外梅　麦
ぞひきる行ちう法法ぶけて　申
月ひする琴を[illegible]ゆくわて至　蘿

松風ち新酒をまゆす秋宵か　支考
自ちうふく石垣の上　雅性
河の門おいう麻の飛うて　菊

見て八潟云の船を引する　雪芝
世ちもはわしいすちうつうと　惟然
この山すして世る　卓袋
麻おふる芋屋の虎ハまれうて　望翠
床て天を[illegible]ちうて　考
ちひす鏡行の絵をまち捉て　惟然
空嘆の中を[illegible]引のけ　芝
仕合と夫鶴の舟をのうちんさ　菊
ゆふけと餅の[illegible]れるつ　聚
さのしと注ふを[illegible]ぶて　袋
大立屋敷屋の帰る芋る　菊
月のあ世けて[illegible]ぬ藪　陳　考

白の袋のはなれ苔白ゆきやう　芝
きハつ苔と苔草てき同し　紫
就といふ宮をしていく秋　秀
月新千又ちくさ責忠仏　聚
かくさ義忠の行はひや　雄
咲花千毎年嘲千走さう　蛙
訪年をうけて法橋桐　紫
音と物のけしめの結るあて　芝
四恵の分ちるる仏なれの　秀
色湯の門めさい入ちちる　雄
一里の舟と板の　聚
山ハる氣密柳のきの黄千宋て　菊

なふれてちる畑の家　秀
毋寸ちちる花て有の物さひし　芝
氣の義る色　紫の中　紫
傳宝の数を話ふ入物の白　雄
さる氣ものを訪し海ハもむし　芝
小金と八むひ金きのこの寿　蛙
ちんとの風千人乱りなり　秀
ちちちぶなちは鶴ちて　菊
ちりけ話の寿千　雄
鶴と冷ハすちちる為秀　聚
か減のいまちの門ちちる　菊
浪球をちちてきれハ寿寿　秀

こぼれて生ける杯のもとけ　紫軒
初夕の菊の酒さうを尼の業　芝
何か吹寄て生の清やつく　紫
枯ときまふふるふ梢の枝　秀
月尺ないりさ造化せうる　翠
雪をゆるしとする秋の風　越
演のか家をさるきう　雨
恍千変出してきるけ秋　紫
いるくの齋よりの豆腐の法　秀
雪陰の蓋よりの秋く花の枝　軽
松を つるひるすの明　芝

[illegible]れる[illegible]の松雪
[illegible]れと新[illegible]　菊
水かる池の中[illegible]
藻外[illegible]
[illegible]やうと[illegible]の月　菊
通[illegible]の[illegible]尺五[illegible]秋　秀
[illegible]仕[illegible]一[illegible]て[illegible]の魚　越
屋[illegible]
[illegible]本[illegible]　菊
[illegible]物[illegible]　秀
中[illegible]秋の吉[illegible]　越
[illegible]振[illegible]　菊

作圓
支考
惟然

山ちゝ明杉うらうきて春る　秀
雪霜し氣高き葉の陰の椒　然
山手門あるうるかの月　翁
紅葉さくけの人のうけ花　秀
ま塩先ゝ信濃のふいうし　然
尺て通る紀三井の花の笑ゝ　翁
苔おいうゝいうゝ永き　秀
二ちゝの又砂ゝ朱かまて　然
春を手孫を大ゝうゝ　翁
桜咲の西瓜ハゝ成ゝきゝ　秀
雪嶺のさゝもむきゝきゝぬ　然
大切氣なゝ二月雪は後　翁

雪ゝ紀ゝけし中の泥花　秀
来ゝ行ゝの赤桃ハゝ氣出家京　然
裏の垂蓋ハ近手の他　翁
風ゝゝ者のやゝ月尺ゝ　秀
朱雀院を庭の正面　然
さゝゝめ踊のゝ石ゝ　翁
霜汗のゝゝゝ方の音　秀
ゝ能を作ゝ越ゝ杜の風　然
大工はゝのれくゝゆる　翁
朱橋ゝゝゝゝゝ　秀
かゝゝて市れ中を押ゝ　翁
此ゝゝ陳生ハ花の雪ゝて　然

野の内のうの花めけめる　芳

松茸や切てちらす山の風　惟然

雨手毬多の志ろき秋風　古芳

おもしろく咲すぎて自然て　猿雑

すき入人ふく次の居風哉　菊

くこ山さきをこし一直歩　芳

ウのさしこみる花来て帰　然

ゆけめ越林をとむすび稲　菊

至て烟りし伊勢の俳枝　惟

庭きくふくて吉風の家造　然

内義もて来る酒のとれ除　芳

ちるつもるく又も有り改なみ　惟

ゝ雪八洛の茅生の雪　菊

ゝ的ちるあちられて一ゝ　芳

尺すゝ浦れぬ魚義の内　然

ちゝはゝく阿る九の分　菊

魂を引ゝ　弩の上ゆ　惟

行ゝの市ゝ立て雪ゝ出谷川

嗜止亭杉の月を尺作ゝ

外ゝて分ゝ弩ゝ月尺ゝ　菊

秋の内ゝに魚荷造　之　嗜止

ホのうら地に菊作り箱吹て　惟然
ゆりものの名をよこすのむ中眺　西吾
世ていると朱てもゆ月を笑うる　支考
板の枝をれるしるしをうう　之道
ゆ川こつけ玉茶を引て尺う　青流
火のようなりうら寿のつぶけ　菊
蓮とれハ椀のうちんの作うう　止
坂下てうう一里行て来う　然
思ひて笑とうたて生の養　重
村のむ尺安子集て扇う　考
嫁とうハ女くうう出をけ　菊
大ようるれ秋の雲やけ　流

汁の実を又味ふ新の月　之
すきの中へ蜂のうたむ　止
椀ふをてうれうう遠ものうけ　考
打くくくぬきの旅人　重
ぬうくうう濱の茶汁をゆうけ　然
きうしうけてうくう茶延　菊
めりきうと油の方蜂あうう　流
又白玉やう椀打てけ　之
名号をのうう尺きうて杉青　重
竹筒のくこ山川の末　考
大根と椀打ふて秋雲う　菊
茶筵意うう角のすやけき　然

ゆきされて宿きハ関守もむ秋尓さよ
半造作てかけり陰ゟなる
寄ゑしゟ針立ふ呼て帰る夜
地よ走める作て砂白うりむす
雅の法やりうそて一羽鶴
ふりはきみひよ椎さけて行
雁入をはやよ伺ぞ寺三井の鐘
枯さ薪を深山ゟしれく
人しの底を房らぬ花盛
咀のゑうまを移ろうつり行

菊月廿一日淵江車庵亭

止 壺 花 菊 流 考 壺 然

秋の粉をあつめしまる喚ゟ雨　菊
月よりほとハ蔵葉身ずし虫売　車庵
両の山二たかれ三たぶ隔て峰て　酒壺
走り行る牛のよわくうこくと　游力
然の名をおんまし世ゟ吉性老　諷竹
小袖をぬしてる扇しる大俵　悦然
使やるを寄てそて折らまれ　支考
かくてよ醫者の尺世為れよる　菊
拭ひ立無しの枝きしうしと　庵
寒て松る弁当の梶　壺
紀よう足谷りけさ着りゝり　力
すりきりそくハ妙ハえしきまゝ　考

恋の末ぬれぬ袖ハ有貸う百の板　武
雨音の角のかうき川　蘭
火しるしるし菜畑を云う清う導　菊
七種やしハよろ時陳ふ太　力
尺とうは義の菊菊やう手　雪
小屋新ふしふ金板の書　然

所思

世をやけ人ふし手秋のうれ　菊
世のさうけの木ふう苦　況
月しるむ菜ふ紅ふの紅て　支考
ちゆまを水をもしあうむ　游力

手合相打を入て寄物を
流ていうみのようる後ろを　飄竹
ぬ分ぬ苦百の時きを　車齋
塀の霞仏ふ赤ふ梅ちる　洒堂
綿毛ふまの意ふの仏手れる　睡止
塩ふの塀の　残きさう紀　惟然
法ハまの有する系ハ鐵ふきた　発神
かくまふ華ふまふる松風　足
法ふしふと山河の鶴ハ之うれて　菊
地義の塀ふ秋ハうれき　齋
仕ふ多ふ多ハ義ふる鶴の角　考
塩飽の船のようと入ふむ　竹
然

袁也子等の芝引吹きて　正
和側々永々醫者の見るすさ　臺

園女亭　菊

きく屋の男よりて見る菊もれ　園女
もらちらすあるをものすり月　風竹
ひやしと朝の庭をはらはけて　渭川
ぬすびとさまは人られ　支考
小ふすまの障の猪ひら　帳然
鞍を袁てゆ　加
ゆ〳〵しき稲子弘をためて見る　洒堂
細ふさくらの枝代　舎羅

頃こまちよりと盤の乳しみて　何中
夢情のうちハ小座て火を焚　菊
侍〳〵めと鶏る嫁のさ免すし　女
風うふてのむ子綿のすり初　休
それしと舟のもくる板の家　川
秋法ひけしる町君の秋　考
ゆ〳〵れ〳〵や濱る面る青　然
ひくんのめくさられてかゝる　堂
き芝ハ線すもゝ京の朱　菊
出代　時の一　中
通ひ後を横るあるねハをいる　休
志とろすあくの見楼　川

はるとをうつくしむ雪の豊　女
雪のうへにしるしかうふる郎　秀
紫雲の雪のそばをはしるを　然
清義は子夜のしらむも　仲
上云。橋の義を川の方　翁
地図の中を鶯のはさつく　女
小かはひを不防を鶯とあるを宇　豊
行の仕むしのさかる草　然
有教を寄て繚角の夜の長さ　仲
枝一本をそのはきし　中
陸鶯のそれも神のめされて　翁
老のちうにはしりる　川

併ちきる梅のはうの嬢うさ　秀
義如　雪の　殘てうさ多ふ　女
河のわの清逢をあうさ　豊
梅のさし木うう　伸　然

百事下枝の木百をいうう　仲　翁
第しを　枝うう　山　家　浪化
陳うう　殘ひと　殘の　詩うれて　玄来
動うう生けよりの生徒　如舟
田植と作うう　姑の　起　翁

業行ちすむしのけやそなたと　出翠

ゆくすえはゆくすえ　菊花の花

いまつかと　丈芳

さらけ　境子のひる　秦　花籠

清水むる海のふるさと　秋立て　菊

うたれうつ　ふる　秋ゆく　し　英

又ねてうつ　ねてうき　家の雲　牧

松風と　ちる　ひ　ゆく　ん　菊

ねしや白ちさりる　花の　雪芳

故ちす　変子　をくる　松　出　菊

秋風子　実れて　赤　ゆく　西李

依て　ちる　けし　稀の　花　泥　胡竹

ちりて　ちる　ち　新　風の　里　さる　て　菊

年歴不知

松　松子　すう　ひけ　ちる　ちる　ひ　主来

隆　おと　ー　ちく　ゆる　花　の　花　許六

ひ　ちる　ち　ゆく　ちる　松　の　子　風　菊

長　以　羽　松　と　四　五　言　の　ち　菅良

吹　ち　れ　て　鶴　の　角　ち　ち　く　千那

梅ちりし杉ーーその降る古河波　春
いらし綱手場をきのえるゐるは　六
河を笠くろみゆり八ハ何故　菊
行かの花そ鄙ひを吹いて　良
天高くれと地まで行んかる　路
何られく紫吹風もゆきおれと　秋風
窗の夕手生おもり漢　菊
こけうる霧かをかして付ぬひ露
らうしと句るハ跳躍花しこ
すゐ鬼尽しとの法の笑　菊

かれ果てうしろむ鏡の乃きしき
鉄屋つゐ立て走りけり　住ゝ
愛山や傾しの山や浅山や
高上そり旅るくえうし　清ゝ
霄の雲そかかる山の月さしく
等ありくてより小男鹿の角　ゝ
笠露もられしくも氣もありまさ
茂りてえるる小倍ろうつふ　ゝ

角のきめとの深きハ佐く
世のうしろみいきさ佐の手柔れ い
ようく老てみはてくし失れて
屋敷のうしろみ翁の後 い
老の一生火ちるうを社
うねめ百玉のお絵のすりき こ
はちうもをよ手花の内
二町年と西と佐のきこ命こ い

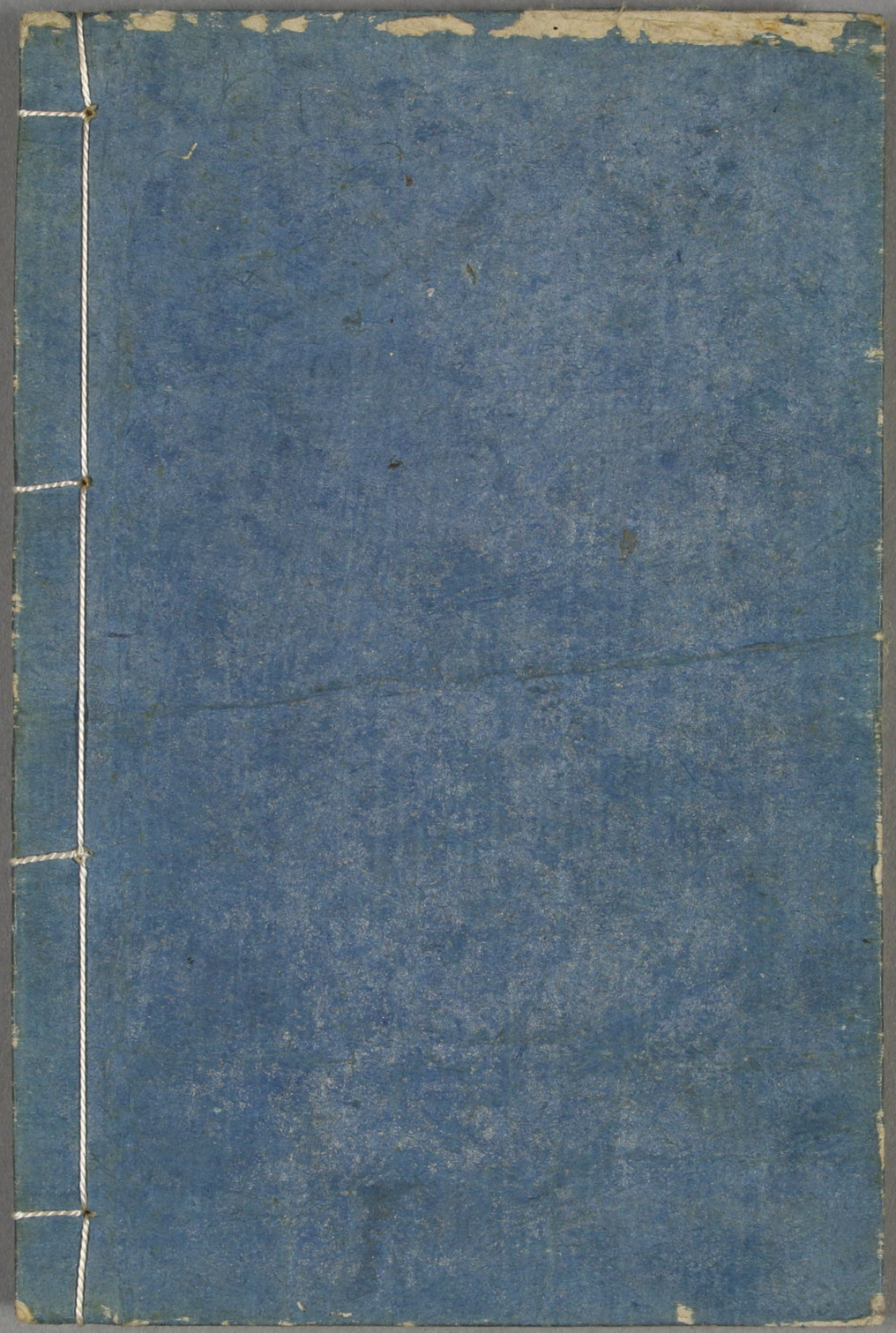
板の風よ三かし紙 吹
三年木橋と作物ハひう柿葉生 い
小信ふうハ一可こ中ち所
約解の結ち家良の風的て い
家志ハ色紙を物る家ひち
宮国り蒙子好れ色て俗 い
すきを切て窪手ふ
節おふて康外ち入窪の張 い

俊かるしらくく稼の粥とく
更科の里の姿をゆのそらり
端居うちれるはきみ石竹
交るうしろえうるしと物さび
形ち走りしのかひあくもあれ
弥ふかうく猫の恋白
人しるあ中を尖ぬもれ合
内老の身無打指を如

ゆ――きの雪ハかくる秋之
きのふ見ハ梅の枝のうち

俳諧一葉集附合之部終

一具菴藏板

文政十年丁亥仲秋刻成

製本所
江戸本石町十軒店
書肆　萬笈堂英大助